

惠檀兩流の教學

小方道憲

惠檀兩流の教學の相異を強調するのは惠心流の口傳で、漢光類聚は傳教大師が道邃にうけた法門は良源に到り、覺運に宗教分を惠心に宗自分を受けたとし、後に檀那流は始覺、惠心流は本覺門に立つと云はれる。然しこの傳説には異説もあつて不正確であり、又惠心流が正嫡だとする意圖をもつ。即ち心要を源信、略義を覺運、略文を覺超が承けたが覺超は覺運から略義をも相傳したので惠心流には三部とも傳はると云ふ（法華略義見聞）。遂には、惠心流から云へば檀那流で檀那の先徳は惠心より上臈であり、僧正になり、十題皆得の堅者だから大師の法底を得たのだと云ふが、法臈は内證によるべきで、僧正は没後の贈官にすぎず、十題皆得の堅者など古來ないし、後嵯峨天皇の時杉生一派を正嫡と定め檀那流の經海・俊承は勅狀で俊範の弟子になつたと優劣的主張をさへする（二帖抄見聞）。

かゝる惠心流の説は現在疑はれてゐるが、檀那流の口傳が少く、明かに結論づけられぬうらみがある。

茲に惠光房の『宗要白光』と惠心流の『宗要柏原案立』『宗要抄』なる論義の口傳書がある。鎌倉末より室町にかけて成立したとされ、ともかく兩流の發達した口傳をのせ、同一算題について述べられてゐるので正しく兩流の主張を比較出来る。特に宗要白光は檀那流の唯一のまとまつた論述なので、これを通して兩流を比べてみる。

今傳承的な天台學の立場で共通な八十九算を分析分類してみると、第一は兩流異義ないとするもの。第二は昔は異、今は同。初重は同とするもの。第三は異義はあるが、一邊には定め申すべからず。約東の不同。異義は常にはとらず。いづれの義も相違なし。取捨は人の意にまかすとするもの。第四は一方は無異義とするに他流で異義ありとする。各流の主張に矛盾あるもの。第五は兩流とも異義とするが本覺證道では會通されるとする五群に分けられる。これより、兩流の異義は兩流の各分流（惠檀八流等）間にもあり、一流に二義をもつこともあり、各流の同異まちまちで惠檀兩流に大別出来ない。又異義の時も觀心證道の實義からは會通されるので、結局兩流の別は兩流が始覺本覺に區別されるか否かにかゝつてゐる。

所が檀那流も宗要白光は、宗要の算は一宗の大事たる證道の事は表面には下されぬが、算題のうちではこの大事を秘事とすると、證道即ち本覺に立つと明言してゐる。乃でこのことを二三の方面から吟味してみる。惠心流は普通教行證の法門は檀那流には傳はらぬと云ふのであるが（法華略義見聞）、宗要白光は、惠心流は止觀は觀心を明し六即を立て、玄義・文句は教相だから六即を立てぬとして止觀を重くみてゐるが、當檀那流は玄・文に六即を立てぬのがかへつて止觀に勝るとする、それは止觀は修觀を明かすから解行證の次第をもち六即を立てるが、玄・文は直接如來の深義を述べてゐて解行證の次第なく、即圓即悟で教行一徹であり、この時は教相還つて高く觀心は劣ると云ふ。——もつとも惠心流でも檀那流の澄豪が、達者は解行證同時で解行不二だと云つたと云ふ場合もある（摩訶止親見聞添註）。——檀那流の云ふ教相とは「教爲一面即觀談」（靜什抄）るので、即ち教を教とみとめることは主體の現實そのものなの

で、こゝには客觀的な教はないと云ふ意味で教道でなく證道に外ならない。「教證二道中以證道爲本」し、證道は地前教道、地上證道の義でなく、行者の實證を云ふのである（宗要・白光）。

四重興廢について惠心流の口傳でも、惠光坊流は我流には正意でなく委しくは談ぜず（二帖抄見聞）と間接に認め、又檀那流の遍教は本迹二門は理に興廢なく用に興廢ありと云ひ、觀心大教興ると本門大教は亡ると云ふ（法華略義見聞）。檀那流自らは、當流にも惠心流で云ふ義もあるが、同じ説き方をしない。觀心を立てるのは惠心檀那流とも入門のことで、檀那流では教行一致で二字一言みな觀心で、爾前・迹・本も一切が觀心の上のことで、又觀心は行者の實證をさし法華の圓とはこれを云ふと、觀心證道を認めてゐる。

本覺について檀那流も「無作三身現○始覺歸本覺」「自受用身如來者。本覺顯照名爲智惠佛」（宗要・白光）とか「本覺都云但迷當體云也。貪即本覺體釋此謂歟」（靜什抄）と用ひてゐるが、その用例は少い。然し本覺の意味は證道・本地・無作等他の同義語で表現されるのであり、一方惠心流でも本地と本覺を他流は同とするが、當流は法界末分を表はす本地が勝れ、本覺は覺、不覺を分けるから本迹相對の分で劣ると云つてゐる（二帖抄見聞）。故に本覺の語だけに注目して檀那流を始覺門と云ふことは出来ない。

本迹の淺深は中古天台の中心思想とされ、惠心流は淺深ありとし、本迹に眞如・事理・因果・色心等を配し、檀那流は淺深なしとするのだと區別してゐる。だが檀那流も迹門不變眞如、本門隨緣眞如は惠心流の義で、當流は一應二種眞如共に本迹に亘ると云ふが、又迹門は不變を面となし、本門は隨緣を本と爲すと習ふとなし、或いは迹門理圓・本門事圓と惠心流と同義を認めてゐる。他方惠心流で

も、本迹共に隨緣・不變の勝劣ありと云ひ、他の口決では、本門は不變勝、隨緣劣と云ひ、又逆に隨緣勝、不變劣と習ふこともあり、なほ同不同一定しないのは法華に二意がある爲だとも説明してゐる（八帖抄）。更に杉生は淺深あるが、龍禪院流、横川惠心流等は淺深なく、檀那流でも北谷一流は淺深ある（直雜）とか種々に云はれ、楞嚴先德は一、依門決理の心からは本迹は各別で、二、依體決理では同だと云ふ（法華略義聞書）。結局、淺深はその前提の立て方により種々に説かれるので、兩流とも本覺本門を中心としてゐるのである。

最後に惠心流でも末流にみる優劣感の態度のみでなく、惠心は從果向因、檀那は從因至果の教相を偏立すべからず（玄義私類聚）とか、羅漢退果算で「御廟相承、退不退各佛說一邊」で失はないので、偏立することこそ失であると云ひ、又證道八相の説法利生を説明するのに惠光房で云ふ三勝の法門をかり、明星は釋尊の日が入り彌勒の月が未だ出ぬ今の二佛中間の闇を照すが、佛寶入滅した時僧寶が受持するのは明星と同じだと云つてゐる（宗要抄）。檀那流は宗要白光でみると一層よく他流に聞く態度で、惠心の御義も甚深なりとか、惠心流の子細を尋ね習ふべしと云つて、抗辯的でないのである。以上、宗要白光を中心に兩流の教學を比較してみると、兩流に二分さるべき異義はない。中には各流の習とも云ふべき、等覺一轉を相那流はヒトタビテンシテとよみ、惠心流はヒトメグリと云ふのや、竹林房は多く外典より證據をひろつて法門の義勢を助けると云ふのがあるが、それは兩流教學の本質的條件でなく、解き方、約束の不同によるみかけの不同はあるが、本覺證道の實義は一つであると云へる。